

●中島かずき

最終候補作のうち、宮園さんの作品を除く四本がエンターテインメント系の作品だった。

これらの四作に共通する印象は会話が達者だったこと。とにかく舞台の上で面白いことをやる、観客を飽きさせない、そういう意識が高い脚本だったと思う。実際の公演になれば、きっとそれなりに受けていることだろう。

ただ、少し観客に媚びすぎではないかと感じる箇所もあった。

選考会のあと関係者に聞いたところ、限られた観劇人口の中で動員を増やしていくためには、とにかく観に来たお客さんに喜んでもらわなければ先につながらないという意識なのだろうということだった。

なるほど、それは道理だ。

それがわかりやすいエンターテインメントという方向にはっきりと出るのは、九州という土地柄なのかもしれないが、抱えている問題は多分、地方でのプロ演劇活動全体に共通するものだろう。

だったらしかし、ライバルはテレビであり映画である。演劇よりも遙かに安価で手軽に楽しめる娯楽に対し、どう戦っていくのか。

シチュエーションや前半の展開は面白くても、ラストがもう一つお手軽に感じてしまう作品が多かったのが残念だ。もう一步前へ。人間関係や個人の意識の深いところまで踏み込んで行ってくれば、さらに「面白い」作品になるのに。

大賞受賞作の森馨由さんの『白波の食卓』も、ラストのヒロインの救済の性急感は否めない。だが、そこに至るまでの細かい心情の積み重ね、深刻でいると同時にぬけぬけと生きていく人間の有り様、地方都市のゆるやかな閉塞感の描写などで、他の候補作を一步抜きんでていた。僕はこの作品を大賞に推した。

第1回から、見せる意識の高い作品が集まったのが、九州戯曲賞の特徴かも知れない。

現場で鍛えられた書き手のみなさんという感じもする。

べ切も辛い。劇団運営も大変だ。だけど、その状況の中で、書き手としてもうちよっとだけ踏ん張って粘って書いていけば、もっと面白い作品が誕生する。そういう土壤があると思う。

森さん、おめでとう。その他の最終候補作に残ったみなさんも、今後に期待しています。頑張ってください。

●横内謙介

審査では「白波の食卓」を一番に、「吉林食堂～おはぎの美味しい中華料理店～」を次点として推した。

「白波の食卓」は人物の魅力に溢れている。それぞれが勝手に生きていくようでありながら、死者と故郷の海によって、結ばれている様子が、作為を巧妙に隠しつつしたたかに描かれていた。過去に縛られた姉の再生のドラマが、ラストに向かって少し性急に走ったのが惜しいが、そこに至るまでの、姉のストイックさと、妹とその友人たちの発する若々しいエロスとの対比の鮮やかさなどが、その欠点を補って余りあると思った。

「吉林食堂」は重く、大切なテーマを誠実に且つ、芝居としての楽しさ、面白さも加えつつ、しっかりまとめていた。難しい現代史の問題を、家族の関係だけで描ききるアイデアと手腕は特筆に値する。しかし、ずっとすれ違いで来た母と娘が、最後まで、自らの意思で再会することがなかったのが残念だった。この二人が出会う瞬間を強靱な意志で描ききることこそ、この芝居の最大の見せ場であろうと私は思う。

「春、夜中の暗号」は、得体の知れない魅力に満ちていた。会話は極めて自然で軽妙なのに、起きていることは不自然極まりなく、良く分からない。その不安定さ、不思議さを面白いととるか、書けていないととるか。審査でも議論の分かれるところであった。頭の悪い私は、もう少し説明してくれないと、最後までこの話に興味を持ち続けることは難しいと感じたが、審査員の並びが違い、アンチテアトロ派が多かったら、もっと高い評価を受けたかも知れない。

「ひとんちで騒ぐな」の作者は若きテクニシャンである。たぶん、実際に上演して、最も大衆をひきつけるであろう。だが戯曲賞として考えると、技巧ばかりが目立ち、この作者はまだ作家としての自分のテーマに発見していないと言わざるを得ない。力のある若手だと思うので、その時を楽しみに待ちたい。

「トリコロール～労働の自由と平等と友愛と～」は派遣で働く女性たちの姿を今日的な視点で描き、新しい労働者劇誕生の可能性を秘めていた。成功すれば「蟹工船」の復活よりも、意義深いことだと思う。ただ作者の実体験と、それをエンタテイメントとして仕上げようとする作業の間で、真に描くべきドラマにブレが生じたと感じた。貴重な視点を持つ作家なので、更なるテーマの掘り下げとチャレンジを期待したい。

総じてレベルの高い作品が暖まったと思う。この賞の今後の発展に大いに期待したい。

●松田正隆

私は『春、夜中の暗号』を推した。

この作品は、坂口安吾の『桜の森の満開の下』をモチーフの一つとして書かれており、作者の個人的な内面を動機とする他の候補作とは違う書かれ方をしているのではないかと思われた。それゆえ、男が女を監禁するというドラマの閉塞感のみに留まることなく、安吾の世界（暗号の世界）へもつながり得るような開放感があった。三月三十一日と四月一日、男の姉が届けたカニ、季節外れの台風、ネギシの来訪、コンビニの事件、名前の記憶、など。この作品にちりばめられた暗号が、謎解きに陥ることなく、またドラマの筋に回収されることなく、心地よく劇を推進させていた。いま、演劇の時間があるとすれば、映画とテレビが登場して以来、それは劇の展開のためにはとてもふさわしくない。演劇の時間は、おそらく演じる者の「存在」を際立たせるためにある。「存在」の時間とは、既存の劇性がなにも展開しない時間のことである。そのような意味でこの作品にはうまく社会化できない、「はざま」のような時間が流れていた。

『白波の食卓』は洗濯物などの小道具の使い方が面白いと思った。生きている者によって語られる夏彦の物語は、死者の追悼であると同時に、夏彦という夏の記憶の貪りであり、基子においては弟（その分身めいた信太郎）との、友人美咲を通しての近親相姦でもある。というか、そのような夏彦の死のイメージによって登場人物が塗り込められてゆくさまが作品にグロテスクな感じを与えていた。

●土田英生

受賞作となった森さんの『白波の食卓』が最終候補5本の中ではずば抜けていると私は感じた。佐世保の海辺に暮らす人々の佇まいをや心の底に沈殿した想いを、東京からやって来た美咲という女性を異物として介在させることによってあぶり出している。技術的にもこれだけ多くの登場人物に立場や性格を与えて書き切るには相当なものなのだと思う。

川口さんの『ひとつちで騒ぐな』は登場人物の出し入れのテクニックとしてはかなりの力量を感じたが、まだ笑いが消化し切れず、細かい笑いの為の作為がはっきり見えてしまうのが残念だった。シチュエーションコメディは自然に笑ってしまう域に達して初めて成立するのだと思う。

宮園さんの『春、夜中の暗号』は流れる時間が歪んでいて、その点では劇的であると思う。ただ、雰囲気流されて書いているように感じられてしまい、そこが残念だった。最後になんとか背景が分かる仕組みになっているが、そこで意味に収斂させることなく、もっと広がる展開にしてもよかったのではないかと思う。

篠崎さん、中村さんの『吉林食堂』、松本さんの『トリコロール』はそれぞれ題材は面白いものの、書き方がダイレクト過ぎる気がしてしまう。演劇としての工夫が欲しいと感じた。

しかし九州でこのような戯曲賞が設立されて、その第一回に参加出来たことは幸せだった。私も改めて自分の劇作について考える契機となった。関係者の皆さんに感謝している。